



子育ては「がまん」



慎重な子、ものを大切に子、自分の個性がはっきりしている子は、買い物するときでもあれにしようか、品物の前で考えてしまいパッと買うことができないものです。親はこんなとき、「早くしなさい」と急かしたりします。イライラして「何で決められないの、グズなんだから」ときついことを言うこともあります。急かされた子は、混乱してしまいます。自分ではアレがほしいのだけれども、自分が思っていたのと違う、どうしようと考えているわけですから、

ますます決めることができず、「じゃ、いらぬ」と答えてしまいます。

早く結論を出したがるのは、子どもにとって気ばかり急かされて苦痛に感じるものです。こんなときは親自身が**がまん力**をつけなければなりません。親もゆったり構えて子どもとつき合うことです。そのためには短気はいけません。**怒りたい気持ちをがまんすることが肝心です。子育てには「がまん」がつきもの**です。大人になると子どものころ、自分もそうだったということを忘れてしまうようです。

「こどもまんなか **こども家庭庁**」は何をするところ？



こども家庭庁は、少子高齢化、子どもの貧困、いじめや虐待、子育ての負担など幅広い子どもの問題に、各省庁がバラバラではなく一元化して対応することを目的に2023年4月1日に創設され、「異次元の少子化対策」がいよいよスタートします。この度、こども園の保育・教育と直結する「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン」がこども家庭庁から示されました。

「はじめの100か月の育ちビジョン」 *The First 100 Months of Growth Vision*

こどもが小学校に入るまでの重要な時期に、一人一人が健やかに育つことができるよう、みなさんに大切にしてほしい考え方をまとめました。「羅針盤」が進むべき方向を指し示すように、国や自治体がどのような政策に取り組むべきかを示す役割を果たします。

お母さんがこどもを妊娠してから、小学校1年生の途中くらいまでが、だいたい100か月です。**長い人生において、人格の基盤を築く、はじめの重要な時期**となります。

人生を幸せな状態（ウェルビーイング）で過ごすため、特にこの100か月が大切な時期です。しかし、生まれるとき、保育園などに通うとき、小学校に入るとき、家庭、園、関係機関、地域などの間に「切れ目」が多いため、これまでは段差のある高い階段を上るようになっていたが、それをなだらかなスロープにして、このビジョンを継続的、効果的に進めていくことが必要です。その実働部隊は、訓子府町では「子ども未来課」であり「こども園」です。このビジョンに基づいて園運営を行っていきます。

「元日はテレビに釘付け 震度7」

お正月を家族団らんで過ごしていた時に大地震と津波が能登の人を襲いました。テレビのニュース番組を見るたびに心が痛みます。亡くなられた方へのお悔みと被災され避難所で不安な毎日を過ごされている皆さんに心からお見舞い申し上げます。

翌日、羽田空港の飛行機衝突事故では、奇跡的に乗客乗員の命が救われました。乗員の皆さんの的確な判断とそれに従った乗客の行動が海外でも高く評価されました。

大きな災害が起きると、海外ではスーパーでの強奪や救援物資を我先に奪い合う様子を目にしますが、日本ではそのようなことはありません。緊迫する機体の中で、お年寄りを先に誘導した若者がいたそうです。日本の教育の賜かもしれません。

日本は地震や台風など災害の多い国です。古事記の時代から、幾度となく自然災害に見舞われ、その都度、人々は力を合わせて立ち上がってきた歴史があります。日本人の気質（真面目、謙虚、我慢強い、勤勉、協調性）は、こうした歴史や風土から生まれたものです。

お正月、孫たちが来ていました。テレビは地震報道ばかりで、「じいちゃん、ビデオを見よう！」と言い出しましたが、「これを見なければダメだ！」と嗜めました。

4歳児が「避難訓練は大事なんだよね！」と言いました。ちゃんとテレビを見て、家族で話し合ったのだらうと思いました。

